

## 博士論文の要旨（和文）

論文題目	現代ロシア語におけるモダリティとアスペクトのカテゴリーに関する一考察 — 可能性のモダリティと体のカテゴリーの相関関係について —
氏名	阿出川 修嘉

現代ロシア語において、アスペクトの意味を表す主要な文法手段のひとつである、動詞の体のカテゴリーは、その文法的カテゴリーという性質故に、他の文法的カテゴリーとの相関関係についてしばしば論じられてきた。本稿で扱う、モダリティのカテゴリーとの間の影響関係も、そうしたもののひとつと数えられよう。例えば、「不可能性」の意味を含む文では、不定詞の体の形態は完了体が選択される、といった指摘がある。本稿では、このような「可能性」のモダリティの意味と、不定詞の体の形態の間にあるとされる相関関係について、*уметь, способен, в состоянии, в силах; мочь; можно, нельзя, возможно, невозможно* といった一連の述語を対象として調査を行った。

第一章では、こうした相関関係を扱っている先行研究の記述について確認し、そこに共通している問題点を洗い出し、それにしたがって本稿で取り組む課題について設定した。先行研究に共通している問題点としては、1) 実際のテキストにおいてどのように用いられているかに関する十分な実態の記述がされていない、2) 「可能性」の意味についての分類が十分に成されていない、3) 不定詞の語彙的意味に関する考察も十分ではなく、体系的な記述となっていない、といった点があった。これらを踏まえた上で、本稿では以下のような具体的課題を設定した：

- ① 言語使用の実態の記述
- ② 「可能性」の意味の明確化とその分類
- ③ モダリティの意味を含む述語と結合する不定詞の語彙的意味の考察

第二章では、本稿の対象がロシア語の文法体系内でどのような位置を占めているかを捉えるために、各種の概念について確認した。

まず最初に、Vendler (1967) の研究などに代表される、いわゆる「状況の性質」の分類について検討した上で、一般言語学的な視座から「アスペクト」のカテゴリーについて確認した。Плунгян (2011, 2012) では、「アスペクト」の意味を、「一次的アスペクト」と「二次的アスペクト」に分類している。

「一次的アスペクト」（「線状的アスペクト」とも）は、話者によって概念化された「状況の構造モデル」において示される、「状況の断片」を表すものである。

それに対して「二次的アスペクト」（「数量的アスペクト」とも）は、一次的アスペクトが持つ本来の機能から変化したもので、主に「状況」の回数性（数量性）を述べる際に用いるアスペクトである。

次に、ロシア語の動詞が備える文法的カテゴリーである「体」について確認した。文法形式の表す「個別的意味」と「一般的意味」という伝統的な理論に則り、ロシア語の体のカテゴリーの表す個別的意味について、Forsyth (1970) と Рассудова (1982) の両研究に基づいて概観した。

また、ロシア語アスペクト論における独特の概念である「体のペア」という概念についても確認し、動詞のタイプ（ペアを成す動詞、単体動詞、両体動詞など）について確認した。

その上で、先に見た「状況の性質」の分類や、「一次的アスペクト」と「二次的アスペクト」が、ロシア語という言語体系内ではどのように表現されているかについて考察を加えた。

また、本節では、もう一方の大きな対象である「モダリティ」のカテゴリーについても確認した。モダリティの意味には、大きく分けて、「評定のモダリティ」と、「非現実のモダリティ」とがある。前者は、命題的部分に対する話者の態度に関するモダリティで、後者は、当該状況が現実世界に対してどのように位置付けられているかを扱うモダリティである。

非現実のモダリティとしての「可能性」のモダリティは、更に「内的可能性」と「外的可能性」とに分類される。「内的可能性」は、「当該状況を引き起こす要因となるものが、当該状況の主体そのもの、主体の内的特徴であるもの」であり、「外的可能性」は、当該状況の生起を決定する要因が、主体以外、例えば、恒常的あるいは一時的な外的状況、社会的法則、自然の法則などによって条件付けられているものである。本稿で対象とする一連の述語では、*уметь, способен, в состоянии, в силах* が前者を表し、*можно, нельзя, возможно, невозможно* が後者を表す。

*мочь* については、その表す意味から、それ自体は内的可能性とも外的可能性とも積極的に表示しないという特殊な述語として位置付けた。更に、この述語は非現実のモダリティに加え、評定のモダリティの意味を表すことができるため、双方のモダリティを対象とし記述を試みた。

また、ロシア語の不定詞について、その形態論的特徴と統語論的な性質について検討した。不定詞の統語論的な性質は、「接語的用法」と「非接語的用法」との二つに分類することが可能である。前者は、従属する語との結びつきが緊密であるのに対して、後者はそうした緊密さがなく、文脈に依存する程度も大きい。本稿の対象である、述語と語結合を成す不定詞の用法は、前者の接語的用法と位置付けることができる。

ここまでの議論を踏まえた上で、以下の分析・考察に向けて、本稿の対象となる、「可能性」に関わるモダリティの意味を含む文の、意味・統語構造に応じた分類を試みた。このモダリティの意味を含む文は、1) 述語（モダリティの意味）、2) 不定詞（あるいは不定詞句；「状況」の提示）、3) 否定辞（否定の意味）という、意味・統語的要素の組み合わせで四つのタイプに分類が可能である。

タイプ I (M-Inf) は、「可能性」のモダリティの意味を表す最も基本的なタイプである。タイプ II ([M-(Neg-Inf)]) は、「可能性」のモダリティの変種と位置付けることができる。

タイプⅢ（[(Neg-M)-Inf]）は、「不可能性」のモダリティの意味を表すタイプである。タイプⅣ（[(Neg-M)-(Neg-Inf)]）は、いわゆる「不可避性」の意味を表す。

第三章は、本研究を行うにあたり収集したデータに関する章である。

まず、ロシア語を対象とするコーパスについて概観した。本研究では、対象とするロシア語の年代的側面と、データの安定性から、ウプサラ・コーパスを最終的に採用している。

本稿の対象となる語結合のデータを得るために、まず述語と同形の各種文字列によって、コーパスからサンプルを収集することから開始した。

この時点で得られたサンプルには、最終的なデータとはならないものが含まれているので、二つのフィルターを設定しサンプルの取捨選択を行った。一つ目のフィルターは、当該文字列が述語として機能しているかどうかなどの基準による、モダリティの述語に関するものである。二つ目は、動詞のタイプ（ペアを成す動詞、単体動詞、両体動詞など）によるフィルターである。

第四章では、前章で得られたデータに基づき、本稿で設定した課題の解決を試みた。この章は、大きく分けて二つの内容から成っている。まずひとつは、第三章で得られたデータから、先行研究における記述の妥当性について再検証を行うという試み、そして二つ目は、得られたデータから読み取れる傾向に基づいて、新たな基準を設定して対象の分析を試みるという内容である。

まず、第三章で得られたデータに基づいて、まず先行研究における記述がどの程度言語使用の実態を把握し、記述されているかについて再検証を行った。

データの分布から、第二章で設定した、論理的に可能な意味・統語構造のうち、いくつかのものは、極めて頻度が低いか、事実上ほとんど使われないものがあるということが明らかになった。

今回のデータでは、全体的な傾向として、不完了体よりも完了体がより多く選択されていることが明らかになった。Forsyth (1970) や Рассудова (1982) による先行研究では、「不可能性」の述語と完了体の結びつきについて特に指摘していたが、これは実際には、全体的に「可能性」の意味を含む述語と語結合を成す場合には完了体が多く選択されているという実態を反映しているだけであり、「不可能性」の意味の場合に限って完了体が特段多く選択されているというわけでは必ずしもないということが分かった。

また、内的可能性の場合には、概して不完了体を選択される割合が大きくなる。特に *уметь* の場合にはその特徴が顕著であり、これは先行研究での指摘をデータの面からも裏付けられたということになる。

こうした全体的な傾向が観察される一方で、いくつかの動詞に限っては、どちらか一方の体の形態でのみ用いられるという文法的行動を見せるものもあった。こうした傾向を数値とともに把握するために、対象を見直す新たな基準として、本稿では「体の形態的対立のスケール」という指標を導入した。これは、ペアをなす動詞において、この「可能性」の述語と語結合を成す場合、どちらの体を選択される割

合が多いかを示す指標である。数値が 10 に近ければ近いほど、完了体が選択される割合が高く、-10 に近ければ近いほど、不完了体が選択される割合が高いことを示す。

この「スケール」によれば、体のペアを持つ動詞は、その選択傾向に応じて、「第Ⅱ群」及び「第Ⅰ群」の二つのグループに分類することが可能である。「第Ⅱ群」に属する動詞（помогать / помочь, оказываться / оказаться, представлять себе / представить себе, случаться / случиться, заставлять / заставить, относить / отнести, позволять себе / позволить себе など）は、完了体で用いられることが多いのに対して、「第Ⅰ群」に属する動詞（служить / послужить, считать / счесть など）は不完了体で用いられることが専らである。

また、それぞれの「群」に属する動詞は、その体の形式の表すアスペクトの意味にも違いがあることが分かった。「第Ⅱ群」に属する動詞の場合には、体の形式は主に二次的アスペクトを表す機能を果たしていると考えられる。すなわち、完了体は「出来事」として「状況」を提示し、対応する不完了体は、当該状況の反復性を主に示す役割を果たしており、この「群」に属するペアは、主に二次的アスペクトの意味において対立していると考えられる。

それに対して、「第Ⅰ群」に属する動詞の場合には、体の形式は主に一次的アスペクトを表す機能を果たしていると考えられる。すなわち、不完了体の形態は当該状況の持続的性質を表している。しかしながら、対応する完了体は、事実上用いられないか、あるいは用いられても、そこでは体の対立は中和してしまっている（いわゆる「体の競合」の現象）。